この本，いかがですか？

ナイチンゲール助産論

Introductory Notes on Lying-in Institutions



・著・訳：金井一薫　訳：島田将夫
・定価 2750 円（本体 2500 円＋税 10%）
・頁：176
・発行：現代社（2024 年 8 月）
・ISBN：978-4874742037

評者：**堀内成子**
聖路加国際大学

出産で亡くなった女性たちの歴史を知り，原因追究と改善，現代の感染予防に繋がるケアと管理，医療建築を学ぶことのできる本である。

「『産院覚え書・序説』訳者　論考」には，1870 年代の時代背景，医療事情，ナイチンゲールの考え方が記され，タイムマシーンで一気に時代を遡った感がある。中でも興味をひいたのは，「理想とする産院の設計図」。ナイチンゲールは『病院覚え書』(1863) で，「病院がそなえているべき第一の必要条件は，病院は病人に害を与えないことである」と記し，感染を防止することのできる設計図を自ら描いて提示したとある。

設計図が大好きな私は，ワクワクしてそのページを見つめた。パビリオン式を取り入れた間仕切りなしの大病室が描かれていた。広いワンルーム形式の空間に高い天井と 3 層の窓，ベッドとベッドの間は十分に離れ，陽光と新鮮な空気で満たされていた。1871 年に聖トマス新病院が建設されるとその影響力は大であった。リバプール王立診療所病棟の写真は，私が 1978 年に新人看護師として勤務した聖路加国際病院 3A 病棟のナースステーションにつづく general と呼ばれていた 18 人部屋そのものだった。医療建築が世界共通の考え方で動いていたことを実感した。

「『産院覚え書・序説』第 1 部」に進むと，まず通常の産婦の実際の死亡率はどの程度なのかという疑問から始まり，病院名・分娩数・死亡数・死因と続く。まるで謎解きのように，次々データが示される。1000 人の出産で 34 人が死亡する時代。現代のわが国の妊産婦死亡率 10 万人に 3.2 人と比べると，まさに命懸けのお産時代である。

家庭内出産死亡率は低く，産院（当時の病院）の死亡率は高かった。産婦が他の病人と同じ部屋に入院，ひと部屋に多数の産婦，産後は 20 日程度と長く滞在，医療者は産婦や術後重症患者の世話に飛び回り，退院後の部屋にそのまま次の入院患者が入る，訓練生・患者付添人が多い等。まさに，現代のスタンダードプリコーションとは真逆の時代がそこにあった。

第 2 部の「産院施設」の構造では，1 床あたりに必要な空間，明るい分娩室，清潔で暖かいリネン（保温クローゼット），温水と冷水の両方が出る流し台，母親が新生児を世話できる環境。そして施設も重要だが，優れた管理者（matron）なくしては意味がないと説く。

補遺に「教育を受けた女性の職業としての助産師」が添えられ，英国の世論は一女性が思っていることをあえて発言できるほど自由な社会ではないとある。ナイチンゲールが，理想の産院の建設と，助産師を住まわせて養成する産院施設に心血を注いでいたことが分かる。彼女の統計学者，管理者，そして教育者として変化を起こそうと奔走した足跡を学び，勇気をもらった書物である。

©IGAKU-SHOIN Ltd, 2025